

**Invited Article****他者の他者性と時間性**

森有哉（東京大学医学部）

**1. はじめに**

私は、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』第二部 IV「他人と人間的世界」を読み、彼の他者論に触れたが、その章では最終的には、さらに時間性でもって他者性が説明されるということが言われ、締めくくられていた。そこで彼が時間について論じている、第三部 II「時間性」を読み込んだが、しかしまだ語り尽くされていないものがあるように感じられた。そこで私はそれがなんなのかを突き止め、いかにしてそれが十分に説明されるのかを明らかにしたいと考えた。

**2. メルロ=ポンティにおける他者知覚**

メルロ=ポンティの『知覚の現象学』では他者知覚ということが問題になる。我々は自らとは異なる存在として、他者を他者として、つまり自我に対する、他我として知覚している。

客観的思考では意識は対自として存在し、その他のもの、つまり諸対象は即自として存在し、他の存在様式はありえない。ここで我々が知覚するような他者は我々の意識の外のものであるという意味において即自であり、しかしまた他の一つの意識であるという意味に置いて対自でもあるわけで、これは矛盾している。そのため他者は客観的思考の中では居場所がなくなってしまうと彼は主張する。

それでは一体どのようにして他者知覚は可能になるのだろうか。

そもそも我々は相互主観的世界に生きるのだと

いうのがメルロ=ポンティが主張することである。

意識は自己自身のうちに、感覚野のあらゆる野の野としての世界とともに、根源的な過去の不透明性を発見する(『知覚の現象学』p.573)\*。

我々の知覚はそもそも時間的な不透明性を持っていて、その不透明性を地盤にした相互主観的世界に我々は住んでいるということが主張される。根源的な過去の不透明性とは、簡単に言えば、我々は現在において現在であったものを振り返るのだが、しかし現在そのものは未反省のままであるということである。

ここでメルロ=ポンティは幼児の例を用いる。幼児は相互主観的世界の中に生きていられる。

幼児は彼を取り巻く全ての人々によって近づきうるものと、無造作に彼が信じている世界の中に生きていられる(同 p.580)

だからこそ、我々はそもそも他者を問題にすることができる。そのため、他者との関係において成立する社会的世界というものは「対象の総体としてではなく、実存の次元として」(p.593) 再発見されると言われるのだ。それは「いかなる客観化にも先立って、我々に付着したもの」(pp.593-594)

\* 以下、メルロ=ポンティ『知覚の現象学』(中島盛夫訳、法政大学出版局)からの引用はページ数のみ記載することとする。

としてある。

このようなものとわかったところで、「社会的なものの実存様相の問題はここにおいて超越性のあらゆる問題と合体する」(p.596) ことになる。問題となるのは常に「私自身を規定し他の全ての現前を条件づけているところの私自身への臨在が、いかにして脱現前化であり、私を私の外へ投げ出すことになるのか」(p.596) ということなのである。

### 3. 他者性と時間性

そして、他者のパラドックス、つまり他者と私は相互主観的世界を形作るが、しかしそれでもなお全ては私によって生きられねばならず、他者自身への現前を生きることができないということは、時間性によって説明されると言われる。

そしてメルロ=ポンティは時間について解き明かしていく。時間は客観的世界にはないし、意識の諸状態の中にもない。結局そこには現前している現在しかない。過去と未来という非存在は居場所がないのだ。「現在はその本質の上からしてもそれ自身のうちに閉じ込められているのではなくて、未来と過去に向かっておのれを超越するもの」(pp.695-696) であり、時間は脱自そのものなのである。

そして、「意識とは、時間化の、フッサールの言葉に従えば、「流れ」の運動そのものである。つまり、おのれを先取りする運動であり、おのれから離れない流れである。」(p. 704) と言われ、主体と時間性が一致するなら、我々が自己でありながら自己を捉えること、つまり主体の超越性の問題が矛盾ではなくなる。

時間とは「自己による自己の触発」である。

つまり触発するものは、未来への推進ならびに移行としての時間であり、触発されるものは、もろもろの現在の展開せる系列としての時間である。(p. 705)

では主体というものがそのように時間性そのものであるなら、我々はどのようにして他者を他なる主体、時間性をもったものとして捉えることが可能なのだろうか。メルロ=ポンティも言うように「われわれは、われわれ自身におけるように、彼において時間化の推進力を経験することは決してあるまい。」(p. 718) しかしメルロ=ポンティはこう主張する。

現在において二つの時間性が互いに絡み合うことができる (p. 718)

しかし絡み合う(enlacer)とはどういったことであろうか。なぜ絡み合うことができるのか。それは単に脱自であるということの説明されるのか。これについては『知覚の現象学』では語られていないように思われる。そしてこの絡み合いこそが私の問いである。私としては、時間性はやはり主体として説明され主体が時間性として説明される時、その絡み合いをもとに相互主観的世界がつくられると考えるのは無理があるように思う。結局他者の他者性を説明しきれていない。他者はそういうものを越えた絶対的超越として、我々に応答を求めるものとして、そもそも汲み尽くすことのできないものとして、現れるようにも思える。つまりレヴィナスの「顔」概念のように、(屋良朝彦『メルロ=ポンティメルロ=ポンティとレヴィナス—他者への覚醒』第3部 参照)

また、メルロ=ポンティは、幼児は相互主観的世界にまどろんでいるということを使うが、もしそうであるならいかにしてわれわれは成熟すると他者は他者であり私は私であることを理解できるのだろうか。そこにはなんらかの契機が必要であろう。レヴィナスの「顔」はこれについての説明にもなり得るかもしれない。

#### 4. おわりに

以上のように、『知覚の現象学』におけるメルロ=ポンティの他者論、時間論から、その残された隔たりを明らかにした。他者はそもそも対象ではなく、他者との関係において成立する社会的世界というものは「対象の総体としてではなく、実存の次元として」(p. 593) あるということが明らかにされる。ここにおいて他者の問題も結局は主体の超越の問題へと集約される。主体の逆説的な構造を説明するものとしてメルロ=ポンティが提示するものが時間である。そして時間というのは脱自作用そのものである。そして「現在において二つの時間性が互いに絡み合う」ことで、われわれは他者を他なる主体として知覚することが可能になると言われる。しかしこの絡み合いとはどういったものであろうか。その問いはメルロ=ポンティが語らなかった部分である。

私は現時点では問いに対する答えを持っていない。私ができたことは問いを立てることだけである。